

自然生態系と災害 ～干潟・海岸林は被害を軽減したか～

向井 宏（京都大学フィールド科学教育研究センター）

2011年3月11日、東日本を襲った地震と大津波に対して、東日本の沿岸域で何が起こったのだろうか。海岸林は何の役にも立たなかったという言説が流されたが、それは本当だろうか。海岸林が過去の津波で後背地の被害を軽減したという報告は、いくつか見ることができる。昭和三陸津波やチリ地震津波の時の、高田の松原の例など。今回の津波では、高田の松原のクロマツはほぼ全滅した。しかし、仙台平野の若松区や八戸などの例から見ると、海岸林の存在が、後背地の被害を軽減したという例は多いようだ。海岸のクロマツの若い木は津波に耐えて残っているところが多い。また、津波は海岸林である程度勢いを減ずるが、河川や海岸に向かう直行道路に沿って、勢いよく襲ってきている。海岸林の道路の付け方、河川の河口近くの蛇行の維持などが今後検討されるべきであろう。海岸林は、ゴミや漂流物を留め、津波の勢いを軽減する効果を持っており、防潮堤を作ったために海岸林を切り開いて開発した場所に大きな被害が見られる。インド洋津波でマングローブ林の存在が見直されたように、ハードの対策に依存しない海岸林の整備や避難経路の確保などソフトの面に対応を考えるべきであろう。

また、干潟、砂浜の存在も、津波の勢いの軽減に役立っていたことが判明した。ハードの防災が、逆に住民の依存体質を促進している面を見逃してはいけない。また、海岸林や干潟、砂浜などは、生物多様性の損失を防ぐ **Bioshield** としての役割も大きいことを再認識する必要がある。復興には、単に元に戻すのではなく、これまでの誤った沿岸管理を反省して、陸と海のつながりを取り戻す復興を目指すべきであろう。